第1回ESDティーチャー・フォローアップ研修会　概要報告

大西　浩明

◇日時　　2024 年 5 月 21 日（火）19 時～20 時 30 分
◇方法　　Zoom によるオンライン方式
◇参加者　30 名

◇実践報告　　愛媛県宇和島市立遊子小学校　西原睦美先生
「地域教材を生かした社会に開かれた教育課程の推進」
～児童のシビックプライドの醸成と行動変容を目指して～
小学校６年総合的な学習の時間の実践から

【実践概要】

〇授業のねらい

全校生徒 20 名の小規模校に昨年赴任
　20 年前には 100 名程度いた　　急激に子どもが少なくなっていることを実感している
６年生は７名で、おとなしい子が多い　　自分の意見がなかなか言えない
総合的な学習の時間で身につけさせたい資質・能力を学校として明らかにする
目指す児童像を明確にし、年間を見通して意図的・計画的に学習を進められるよう、単元構想（カリキュラムマネジメント）案を作成し、学習指導案の検討を行う
　→「遊子の防災大作戦！」
（ティーチャープログラムにおける自らの学び）
・現在の問題が全て因果関係を持ち、つながっているということを子どもたちにどのように意識させるか
・ESD は社会づくりに関わる人々の価値観と行動の変容を促す教育
・どれだけ具体的に授業をイメージできるか
・他校の先生たちから意見や助言をいただき、自分の考えが明確に
ESD を知ることで授業がブレないようになった
授業を創る楽しさと喜びを感じながらできるようになった

〇実践概要

「避難路に関する学習」
　コロナ禍で子どもが学校に来なくなり、教員が何かできないかと学校の裏山の整備が始まった
　地域の方などが協力して新たに避難路ができる（行政がやったものではない）　３年かけて
　　それまでは海沿いの道路を通ってしか避難できなかった
　地域の人のおかげで避難路ができた　→　自分たちも地域に対してできることはないか
　　イエローフラッグづくり･･･防災に関する資料とともに各家庭に配布（約 400）
　　防災マップづくり･･･タブレットを活用し、写真を撮るとマップが作れる
　　専門家にも協力してもらう
　　地域の人に意識してもらえるように
　　文部科学大臣賞を受賞

子どもたちが自信を持つきっかけに
地域の人たちが子どもの頑張りを認めてくれる

NPO の方に協力してもらって、マップ付きのカレンダーを作成
　200 枚を地域に配布

自分たちのつくったものが地域の人たちのところへ広がっていくことの驚きと喜び

（子どもの変容）
　国語科「私たちにできること」･･･環境問題について関心をもち、自分たちにできることを考え実行
　算数科「票とグラフ」･･･小学校でのエアコン使用量をグラフ化
　理科「生物のくらしと環境」･･･現在の問題点と解決方法を考える
　給食･･･残飯ゼロを目指す取り組み
　自分たちでできることをどんどん行動化するようになった

ここまでの取組を各自新聞「防災だより」にまとめる
　ゲストティーチャー（地域の方や授業でお世話になった方々９名）を招き内容を検討
　自分たちのやってきた取組は「共助」につながる　　役に立った！

（成果と課題）
○他者からの称賛を喜び、学習を重ねるごとに、自信を持った発言、より意欲的な言動が見られるようになった
○地域教材を活用し、総合的な学習の時間を核として各教科を関連付けながら学習を進めることは、児童のふるさとに対するシビックプライドの醸成や行動変容に役立つ

○ゲストティーチャーや専門性のある講師が授業に参画することにより、授業の質が高まり児童の学びも深まる

●６年間を通した探究的な学びにつながる系統性・継続性のある教育課程の構築ができていない

●外部組織・人材等とのより持続可能な連携と組織づくり

○意見交流から

Q：９名ものゲストティーチャーと子どもとの関わり方がどうであったか？

A：ゲストティーチャー３人ずつ３つのグループに分かれてもらい、子どもらが各自作成した防災だよりを紹介し意見を求めた。それぞれの視点から意見やアドバイスをもらう。（３回ローテーション）

Q：子どもの資質・能力の変容を具体的に教えてほしい

A：人と関わることが苦手だった児童が、自信をもって質問したり説明したりできるようになったことがいちばん大きな変容だと感じている。

Q：ゲストティーチャーも含めた地域の教育的資源はこれまでにあったのか？

A：地域の人たちが学校に対して非常に協力的なところ。自然な形で話を進めることができた。

Q：子どもの変容と同時に大人の変容も大事だと思うが、関わってくれた地域の大人たちに変容はあったか？

A:子どもたちの頑張りに市議さんが応えてくれ、市の予算で避難路近くに電灯をつけてくれたりした。急激な変化はないかもしれないが、防災に関して「自分たちもちゃんとしなければ」という思いが生まれてきたように思う。本来は大人がしないといけないことを子どもがやっていることで、大人が少し動き出したというところだと思う。

Q：先生自身が「自分事」になった瞬間は？

A:「本当に地震が起こったときに自分は子どもたちを守ることができるか」と考えたときに、あまりにできないことが多すぎると感じた。実践を通して、保護者に伝える際にもより具体的なことを話せるようになった。

Q：裏山の避難路を使った訓練は、今はどうなっているのか？

A：完成以来続けているが、もとは土だったところを上りにくいという子どもの声から、地元の建築業者の方でコンクリートになったり、手すりがついたりして改善されていっている。
そういう経緯も子どもたちが知ることで、自分たちが地域に思ってもらっていることに気づけた。

Q：子どもが自分の家にいるときにどう避難するのかは、どう理解しているのか？

A：家庭によって状況は違うので、それぞれシミュレーションをする時間をとった。

・子どもが地域の人の思いを実感し、それに応えようとする子どもの姿に地域の人がさらにそれを見て活動するという好循環が、地域のアイデンティティを形成していくのだと感じた。

・防災学習でも、他の行事でもそうだが、それをすることでどのような力を子どもの身につけさせるのかを明確にしないと、子どももやらされる学習になってしまう。

・教師の目的、熱い思いが大事なんだと思う。